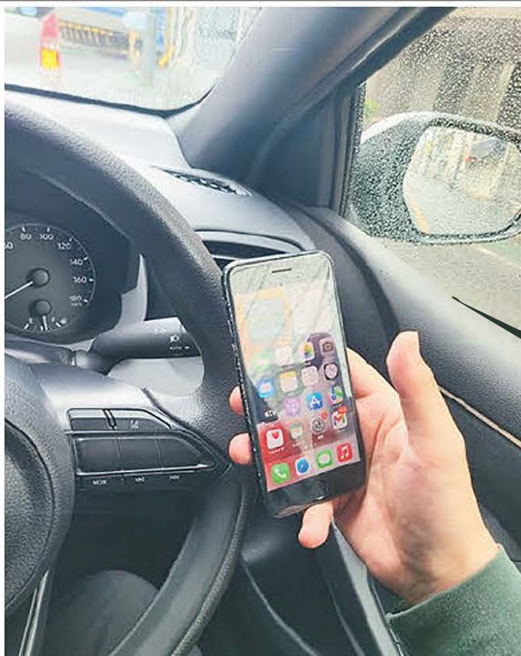




死亡事故率は携帯電話を使用していなかった場合と比較して4倍高い(イメージ写真)

**注意しても改善されず**

死亡事故率4倍  
厳罰化で離職

# ながら運転

何度注意しても改善されない――。走行中にスマートフォンなどを使用する「ながら運転」の危険性に気付きた悲鳴だ。携帯電話を使用しているなかった場合と比較して死亡事故率は4倍となるにもかかわらず、厳罰化するドライバーが離職するなど、運送事業者は対策に苦慮している。飲酒運転同様、ながら運転撲滅に向け、業界を挙げて取り組みが必要だ。

(ダシルバ・サミー、山根藍利)

警察庁によると、2024年に発生した「ながら運転」による死亡・重傷事故件数が、統計を取り始めた07年以来、過去最多となった。また、死亡事故率は携帯電話を使用していなかった場



死亡・重傷事故過去最多

合と比較して4倍高かったことが分かった。今年4月19日には首都高速道路の高島平インターチェンジ付近でトラックが乗用車に追突し、2歳児が死亡する事故が発生。過失運転致傷の疑

「触るのが癖になっている」

ハラスメントになってしまうのでは、と踏み込んだ指導に躊躇するケースもある。関東流通サーピス（埼玉県久喜市）の西野進

社長は「過去にながら運転をしていたドライバーがいた」と打ち明ける。深夜の運転状況を収めたドライブレコーダーの映像に、フロントガラスに反射するスマホの画面が映り込んでいたことから発見。指が画面をスクロールする様子まで映っていたという。

り返し指導するも改善が  
ず、ハンドルのくぼみにス  
マホをはめて触ったり、價  
号前で減速中にスマホの布  
電を始めたりにする様子など

社長、群馬県伊勢崎市）では、2カ月に1度の面談でドラレコ検証結果を記載したシートを使用している。安全項目を詳細に分類し、

「ドライバーだ」と力を込める。

スマホの普及で生活は大きく発展し、便利になった。時間と場所を問わず、

「ながら運転」飲酒運転の何が違うのか」と危機感をあらわにするのは、群馬県の運送会社の役員。車内カメラを導入したところ、年代を問わずほぼ全員が、ながら運転をしていたこと発覚する度に注意喚起を重施。しかし、「仕事柄、積み忘れの連絡やタブレット端末（多機能携帯端末）で連絡を取る荷主など、運転以外業務で使用しなければなら

る」と吐露する。そのト  
で、「社内のルールを厳罰  
化する」とライバーが諦め  
て、別の運送会社に移っ  
ていく。業界を挙げて、な  
がら運輸機械に向けて取り  
組む必要がある」と話す。

るのではないか。取り上げ  
てしまおうと考えたことが  
あったが、しなかった。ハ  
ラスメントの問題もあるこ  
と対策に苦慮。当該ドライ  
バーはその後、自主退職し  
たという。

る。南聲広志取締役は「大企業事故が起った時に、やるべきことはやった」と言える取り組みをしたといえない。タクシーやバスの運転者がSNSや動画撮影するのはどうか？ ありえないはずだ。物を運んでいるのか、人を運んでいるのかわからない。どちらのプロのド

い、現行犯逮捕された容疑者が「スマホを使用して、

## メーカーと協力不可欠 自身の運転見つめ直し

て、臨見運転の検知を幸  
げ、「臨見は意識して自分  
で直せるリスク運転。検知  
することで自身の運転を見  
直してもらい、臨見運転を  
99・9％削減した運送事業  
者もいる」と話す。

その上で、検知に加え  
て、リアルタイムに警報す  
る機能を希望する企業が多  
いという。また、同社では  
ユーザーに対して、行動面  
の対策として、スマートフ  
ォンのハンズフリー通話は  
行わずに後部座席に置くこ  
とや、助手席に荷物や資料  
などを置かないといったア  
ドバイスもしている。

VR（仮想現実）安全教

育機器「らくらく監査システム」を提供するWacware（佐々木章太社長、練馬区）では、地図アプリでルートを確認しながら左折して巻き込み事故をする動画や、位置情報ゲームをプレイしながらの運転で歩行者と衝突する動画など、ながら運転の危険性を体感できる動画をそろえている。佐々木社長は「スマホの普及や動画によって、現在もながら運転をしている人が散見される。事故のイメージが付いていないので、危険性を過小評価していると感じる」と話。

にAイドラレコを導入した北関東の運送事業者は「10回いじって10回ぶつからなければ、安心して大丈夫だ」と思うようになる。注意しても改善しないドライバーには、事故を起こした時の賠償責任を負うという同意書を書いてもらった。故意でできない人には退職してもらい」と言及。

事業者の安全対策として「ドライバー任せではない。会社として事故を起こさない仕組みをつくらなければならない」と説明する。

(ダシルバ・サミール、土室太朗)

VR（仮想現実）安全教

ながら運転の撲滅を目的 屋太朗